

# 第1章

## 情報社会変容

合庭 惇

aiba@nichibun.ac.jp

総合研究大学院大学 国際日本研究専攻 教授  
国際日本文化研究センター

### プロフィール

電子メディア論・情報社会論専攻。1980年代半ばから電子出版の開発に従事、90年代には電子図書館システムの開発にも携わる。現在は、国際日本文化研究センターに設置された文化資料研究企画室において日本研究学術資料情報のデータベース構築に従事。

### はじめに／講義の問題意識とポイント

科学と社会におけるコミュニケーションに関連して、情報社会変容、特に「情報のゼログラム化」と「アイデンティティの変容」に絞って話したい。「情報社会」は英訳すれば、インフォメーション・ソサエティ(Information Society)であるが、実はこれは和製英語である。この言葉を使った「高度情報化社会構想」が1970年代の日本で生まれているが、それには以下のような歴史的背景がある。

明治政府は富国強兵・殖産興業というスローガンで軍事・産業立国をめざしたが、産業立国という点では国民の学習の場として勸業博覧会をたびたび開催した。日清戦争終了後には大阪で初の万国博覧会を開催したが、これは日本がアジアの盟主として国際舞台に参入した象徴的行為でもあった。

そして約70年後の1970年の大阪万博は、まさに第2次世界大戦後の高度成長の1つのシンボルとして開催された。これを推進したのは政府、当時の通産省であったが、大阪万博成功の後、国策の展開の1つの柱として、「高度情報化社会」が提唱された。学問的な領域からそれに関わったのは、当時は

ブームであった「未来学」の林雄二郎、梅棹忠夫などであった。この構想を海外に施策として紹介するときに使われたのが、「情報社会」(インフォメーション・ソサエティ)という和製英語であり、これを推進した当時の通産官僚の一人が後に作家となり経済企画庁長官も務めた堺屋太一である。

このように日本は社会の高度情報化に非常に早くから着眼したが、政策的な展開は円滑に進まなかった。というのは、日本において通信インフラは国家(当時の電電公社)が独占的に担っていたからである。

私はまだ出版社で学術雑誌の編集に携わっていた1980年代に、電子出版の構想を練ったことがある。当時は、パーソナル・コンピュータがそろそろ社会に登場しはじめた時期であり、1984年には、アップル・コンピュータからマッキントッシュが発売され、CD-ROMのスペックも登場した。そういう状況の中で、新しい出版の形態としての電子出版を模索したわけだが、当時は「ニューメディア元年」という合言葉のもとにVAN (Value Added Network)など地域情報化システム計画が郵政省がらみで動いていた。

このように日本は日本なりに高度情報化の道を歩んでいたが、決定的に日本社会に影響を与えたのはアメリカの情報政策だった。特にクリントン政権時代、副大統領のゴアが積極的に推進したのが、インターネット中心の新しい社会インフラ整備であった。ゴアは上院議員時代に、HPCC法(Hyper Performance Computing and Communication Act)という新しい法律を提案し、アメリカ全土にインターネットを利用した情報・知識インフラを整備しようとした。HPCC法は、クリントン&ゴア政権が成立した後に「情報スーパーハイウェイ構想」として展開された。特にゴアは父親も上院議員であり、アイゼンハワー時代に各州間のハイウェイを建設するというインターステート・ハイウェイを構想したことで知られる。このことが象徴するように、アメリカでは個人個人の議員に政策立案能力がある点が日本との違いだろう。

それまでは日本は独自に高度情報化社会を構想していたが、NTTという巨大な存在に阻まれて難しい面があった。アメリカにならって日本でも情報社会政策を立案する必要が認識され、通産省、郵政省等で審議会や委員会が数多く開催された。こうした委員会などに私も多少関与したが、そのとき感

じたのは、日本社会の情報化をめぐる論議において新しい流れを作るのは、コンピュータ・サイエンスの研究者たちだったということだ。理想的な情報通信インフラを技術的に構築するためには、そういう専門家の助言が必要だが、情報通信基盤を整備することにばかり重点がおかれたために、日本という国や社会がめざすべきビジョンが欠如したまま、技術的な側面だけが進展する傾向があったと思える。

1つの典型的な例がある。日本は韓国に比べて、インターネット整備で遅れをとった。というのも、韓国ではADSLを早くから導入していたが、日本ではNTTが光ファイバーのネットワーク実現を重視し、国もその方向で動いていた。つまり2005年に全家庭に光ファイバーが到達すれば、ブロードバンドの高速大容量システムが可能であるとして、ADSLへの政策転換を退けてきたため、電話線を高速化するという技術をもちながらそれが実現されることはなかったのである。

このような技術的議論が重視された結果、生活者としてのユーザーが実際には何を求めているか、そしてその総意が社会のベクトルをどう変える可能性があるのか、またそれを誘導するために政府はどのような施策をとるべきかなどについては、いっさい議論されることはなかった。いまやE-ジャパン重点計画の最終段階に入ろうとしているが、これに先立って行なわれた数々の施策は、ビジョン欠如の政策だったと言っても過言ではない。

日本におけるこのような特質をふまえながら、今回は、情報社会について、もう少し広汎な視点から話をしたいと思う。

## 1. 情報社会のゼログラム化～アトムからビットへ

### 1.1. 鎖でつながれた書物

オックスフォード大学にはボードリアン・ライブラリーという図書館群がある。昔の図書館さながらに書物が展示されており、数百年前の大学図書館の様子が今でも偲ばれるが、興味深いことに、そこでは書物は鎖でつながれている。かつて書物は一部の限られた人々に、このようなかたちで提供されて

いたのである。言い換えれば、情報は鎖につながれ固定化されており、まったく流動性がないことを意味している。

また昔の人々は読みたい書物を求めて旅をした。イタリアの作家、ウンベルト・エーコはベストセラーとなった『薔薇の名前』で、主人公である修道士ウィリアム・オヴ・ヴァスカヴィル(この小説の登場人物の名前はすべてコナン・ドイル作『シャーロック・ホームズ』シリーズの登場人物からとられている)が、自分の読みたい書物を求めてヨーロッパ中を旅行する様子が描かれている。このように、書物に書かれた情報は固定され流動性がなかったのである。

似たようなエピソードは、福沢諭吉『福翁自伝』にも見られる。本を読むためには、その書物がある場所まで行き書き写さなければならないことが記されている。また当時は、書き写すにあたっては、それなりの謝礼を払わなければならないかった。

……奥平の世話で山本の家に食客に入り込みました。そもそもこれが、私の生来活動の始まり。有らん限りの仕事を働き、何でもしないことはない。その先生が眼が悪くて書を読むことが出来ないから、私が色々な時勢論など、漢文で書いてある諸大家の書を読んで先生に聞かせる。……

その時の一体の砲術家の有様を申せば、写本の蔵書が秘伝で、その本を貸すには相当の謝物を取って貸す。写したいと言えば、写すための謝料を取るのが、まず山本の家の臨時収入で、その一切の砲術書を貸すにも写すにも、先生は眼が悪くからみな私の手を経る。

福沢諭吉『福翁自伝』より

ここで描かれた時代は、ボードリアン・ライブラリーの時代よりはるかに下るが、やはり書物は固定されており、その中の情報を獲得するためには、書き写す行為をしなければならなかったことが分かる。

## 1.2. 鎖から解放される書物

ヨーロッパにおいて王侯貴族の図書館や修道院などに閉じ込められていた書物が市場に流れ出すきっかけは、写本から印刷本への転換であった。

ここで、人類史のメディア技術革命について簡単に整理してみよう。

最初の技術革命：話し言葉の発明（紀元前3万5000年）

第2の技術革命：書き言葉の発明（紀元前4000年）

第3の技術革命：印刷技術の発明（紀元1454～55年）

第4の技術革命：遠距離(電気)通信の発明（1844年）

第5の技術革命：コンピュータの発明（1946年）

現代の技術革命：コンピュータとインターネット

メディアの技術革新は、まず紀元前3万5000年の話し言葉の発明に始まり、紀元前4000年の記録する技術としての書き言葉の発明(第2の技術革命)を経て、第3の技術革命である印刷技術の発明に至る。印刷技術は1454～55年頃、ドイツのグーテンベルクによって発明されたとされている。この時代が長く続いた後、第4の技術革命(遠距離通信の発明)、第5の技術革命(コンピュータの発明)を経て、コンピュータとインターネットによるコミュニケーションを中心とする今日に至っている。

もちろん話し言葉の発明も、それを記録する書き言葉の発明も、人間のコミュニケーションにとって非常に重要な役割を果たしているが、現在のようなコミュニケーションのきっかけを作ったのは、第3の技術革命である印刷技術を通じて、それまでの話し言葉や書き言葉を機械的複製技術により大量に文字化することに成功したことである。

この第3の技術革命は「印刷革命」と呼ばれている。メディア論の世界では、この印刷革命により、西欧近代の基礎が築かれたという見方が強い。グーテンベルクは可動活字、油性インク、木製の手動印刷機を発明したが、それらの材料や装置を使って作った作品とされているのは、いわゆる『42行聖書』である。先に述べたように、当時、書物としては写本しかなかったが、

グーテンベルクは機械的複製の方法を可能にしたのである。当時の時代状況をよく物語っている一節を紹介しよう。

グーテンベルクとシェッファーがかの名高き聖書の1ページを刷り終わるや、この事業の出資者ヨハン・フストは十冊ばかりを手にもこれまでに辛抱強く出資した成果をいかに回収できるかを試しに出立した。聖書を金に替えるために、まずどこへ向かったか。ヨーロッパ第1の大学都市パリである。パリには1万人もしくはそれ以上の学生が、ソルボンヌをはじめとする各学部にあふれていたのだ。そして、そこでにがにがしい挫折のうちに何を発見したか。1401年に結成されて……結束の固い書籍関連業のギルドである、書籍商・製本工・写本装飾家・羊皮紙商組合である。……彼らは他所者が、こんな聞いたこともないほど大量に貴重な本を持って現れたことに驚いた。フストが次々と聖書を売るのを見るや、彼らは警察に助けを求め、専門家の意見として、このような高価な本をこれほどひとりの人間が手にするには、悪魔の助けがあったに違いないと付言した。このためフストは命からがら逃げ出す破目となった。さもないならば、彼の第1回の商用旅行は火あぶり幕を閉じることになったであろう。

E. P. Goldschmidt, Gothic and Renaissance Bookbindings, 1967

E. L. アイゼンステイン『印刷革命』より引用

このように当時の人々は、書物を機械的に複製するのは悪魔の仕業にちがいないという先入観にとらわれていたというのである。ただし、この伝承はフストとファウストを混同したものだとされ信憑性はないのであるが、グーテンベルクたちが開発した新しい印刷技術を示せば、こうした誤解はなかっただろう。なぜなら、当時すでに木版本は存在しており、木版で印刷する方法は確立していたからだ。グーテンベルクは金属活字を用いた点が新しかったのである。

しかし実は最近になって、『42行聖書』は1本ずつの活字で印刷されたのではないのではないかとする、活字についての新しい見方が出てきた。プリ

ンストン大学の図書館長をつとめているニーダムは、『42行聖書』をデジタル画像化し、一つ一つの文字のかたちを比べる作業をしたところ、微妙なずれがあることを発見した。そこで彼は、一行ごとに印刷したのではないかと分析し、金属活字の発明者はグーテンベルク以後の人間ではないかという新説を発表した。もしそれが事実だとすると、印刷に対する観念が大きく変わる大発見となる。

### 1.3. 印刷革命の到来

印刷革命の到来により、人間の情報コミュニケーションのありようは大きく変わった、その1つの例が、下記に示されている。

1453年コンスタンティノープル陥落の年に生まれた人が、50歳の年に人生を振り返って見たとすると、その50年間には約800万冊の本が印刷されている。この数は多分、コンスタンティヌス大帝が紀元330年に新しい首都を建設した時以後にヨーロッパの全筆耕が筆写した本の数より多いだろう。

E. L. アイゼンステイン『印刷革命』より

つまり1500年頃には印刷技術がヨーロッパ全域に伝わり、書物が次々に増産されていった結果、ヨーロッパの書物は爆発的に増加したことになる。それにより、印刷物が普及するとともに識字率も向上していった。当時識字率が向上していたために書物が普及したのか、書物が普及したために識字率が向上したのか正確な因果関係は不明だが、いずれにしても、いわゆる音読から黙読というスタイルが定着し、近代読書人が登場する。それまで書物は、たとえば教会のミサにおいて聖職者が聖書を読み上げ、一般の人々は読み上げられた内容を聞くというスタイルが一般的だった。しかし書物が普及し、個人的に保有することが可能になると、黙読の習慣が根づきはじめた。同時にそれは、内省、すなわち自分の内部で思索する習慣の定着を意味していた。それが近代的読書人であり、近代市民社会成立のベースともなった。いわば読書という行為が近代市民社会を生み出す源泉の1つとなったという捉え方

もできる。

そして、ドイツの哲学者ヘーゲルは、近代人の朝の礼拝は、それまでの聖書から、毎朝配達される朝刊を読むスタイルに変わったという意味のことを述べている。彼はまたそういう人間を世俗的人間と評しているが、そうした世俗的人間が支えたのが近代市民社会である。

#### 1.4. メディア革命による情報の変化

現在われわれが直面しているのは、15世紀の印刷革命に代わる、新しい情報通信革命である。印刷革命によって機械的な複製が可能になった結果、それまで閉鎖系であった情報が解放系へと変容した。またそれまでは写本ではあっても1冊1冊がオリジナルであった書物が、同一物として大量にコピーされることになった。さらに産業革命による印刷機の進歩で、より大量の複製が可能になった。それによって19世紀以降、書物は飛躍的に普及する。

そしてすでにわれわれは、アナログからデジタルへの変化を経験した。1970年代から、印刷プロセスに大型コンピュータが導入されはじめ、金属活字は駆逐されることとなった。それによって、これまで金属活字の上で確保されていた文字が、コンピュータ上のコードとビットの体系に変換された。それだけではなく、これまでの近代印刷が開発してきたさまざまな技術が、コンピュータの中でデジタル化された。

これを「グーテンベルク銀河系の終焉」と表現することもできるが、私は、「超印刷の世界」と称している。近代印刷は金属活字や版によって紙の上に情報を固定したが、それに対して超印刷は、近代印刷を背景に、コンピュータとネットワークによって情報を生成・蓄積・伝送する。また近代印刷は、活字を組み合わせて、あくまでも紙の上に情報を固定するシステムであったが、いったん電子化された情報は、伝統的な出版、ウェブでの展開、メールによる情報伝達などさまざまな形態が可能であり、またメディアを問わずどのように加工することも可能である。すなわち、ワンソース・マルチユース(One-Source, Multi-Use)が可能になったと言える。この結果、もともと情報は秘匿され固定されていたが、現代では情報は軽々と動くようになったので



ある。別言すれば、紙という物質(アトム)に固定されていた情報が電子(ビット)となることによって、重量から逃れてゼログラムの世界に入ったのである。例えば国民的辞書と称せられる『広辞苑』であるが、約22万項目の見出し語と解説が約2900ページで重量3キログラムの書物に収められている。この重厚長大ともいべき情報群も、電子化されることで紙メディアという拘束のくびきから逃れてゼログラムとなったといえよう。

### 1.5. メディア技術の進化

これまで述べてきたように、コンピュータ技術のマルチメディア化は急速に進展している。もともとコンピュータは計算機として開発されたが、それだけではなく、人間の知的生産行為も可能になった。いまやわれわれは文章を書くときに辞書を引くことはほとんどなく、ワープロの変換機能と学習機能で事足りている。また本来なら蓄えた知識と経験の中から自ら選択しなければならなかった作業の大半をコンピュータに委ねることができる。さらに、このようなシミュレーションの結果も、インターネットを通じてどこにでも開示できる。このように情報の流動性が非常に高まってきている。

1970年代に活躍したメディア学者マーシャル・マクルーハンは、ゲーテンベルクの銀河系について、次のように述べている。

活字(movable types)を用いた印刷は思いもおよばぬ新環境を創り出した。それは「読書界」(public)を創造したのである。それまでの写本技術は国民的規模で「読書界」を生み出すのに必要な強烈な拡張力を欠いていた。われわれがここ数世紀の間、「国民」(nation)の名で呼んできたものはゲーテンベルクの印刷技術が出現する以前に発生したことはなかったし、また発生する可能性もなかったのである。

マーシャル・マクルーハン『ゲーテンベルクの銀河系』

このマクルーハンの考え方は、その後のメディア史の研究者、出版・印刷史の研究者たちにも受け継がれた。しかし、すでに触れたように、アナログ

からデジタルへの変化が生じた結果、近代の基盤の1つでもあったグーテンベルク銀河系の終焉が語られるようになった。

グーテンベルク銀河系は書物という媒体において、その統一性の形式を自らに付与した。神の言葉の規範と人間の書物とは、伝統についての相互参照モデルとなっている。神の死と人間の消滅を、書物は生き延びることができなかった。……未来の人間はもはや近代的な個人ではなく、メディア結合体におけるスイッチのオン・オフなのである。

ノルベルト・ボルツ『グーテンベルク銀河系の終焉』

ドイツ・エッセン大学の哲学教授であるノルベルト・ボルツは、早くからインターネットが人間の情報コミュニケーション環境の主流に躍り出ることによって、われわれの存在形態が変容すると主張している。最近出版した拙著『情報社会変容』でも、副題は「グーテンベルク銀河系の終焉」として、こうしたテーマについて触れている。

## 2. アイデンティティの変容

### 2.1. メディア社会と人間

メディアの進化が人間のコミュニケーションを大きく変容させたことはすでに述べた。特にインターネットを情報通信コミュニケーションのメディアとして利用した場合、アイデンティティも変容する。その1つが、プロテアンセルフ (Protean Self) という捉え方である。

代表的なのは、MIT心理学教授シェリー・タークル (Sherry Turkle) の『接続された心——インターネット時代のアイデンティティ』(日暮雅通訳、早川書房、1998年)であり、情報社会や電子メディアについて論じるにあたって非常に話題になった本でもある。彼女は、冒頭で次のように書いている。

マシンという鏡に自分の姿を写してみることで、私たちは自分自身について

それまでと違った見方をするようになる。今から十年前、私が初めてコンピュータを「第二の自己 second self」と呼んだころ、そうしたアイデンティティ変容は、ほとんどつねに一対一の関係で行われた。つまり、ひとつのマシンにひとりきりの人間だったのだ。だが現在では、それが変わってしまった。急速に拡大するネットワークシステム——ひとまとめにしてインターネットと呼ばれるものが、何百万という人間を結びつけ、新しい生活空間をつくっている。そこではものの考え方も、男女の別の本質も、コミュニティのかたちも、私たちのアイデンティティそのものさえも、変わりつつあるのだ。

シェリー・タークル『接続された心』

この本が契機となり、日本でも、コンピュータが第二の自己たりうるかをめぐって論議がなされた。また、彼女は次のように指摘する。

この「シミュレーションの文化」の中でアイデンティティを構築する話においては、インターネット上での経験が重要な役割を演じる。だがそうした経験は、より大きな文化的状況 context の一部としてのみ、理解される。この場合の状況とは、科学技術研究のフィールドと日常生活の両方において起きている、現実と仮想現実、生命と無生命、単一自我 unitary self と多重自我 multiple self のあいだの境界線喪失といった話だ。人工生命を創造しようとする科学者から、仮想的なペルソナを次々につくって「モーフィング(変異)」する子どもたちまで、人間のアイデンティティを生成し経験する方法が根本的に変化しつつある根拠を、私たちはさまざまに見ることができる。だが、人間としてのアイデンティティとテクノロジーの衝突を「ナマで」見ることができるのは、インターネット上にはかならない。

(同上)

タークルは、インターネットのゲームの世界にはまった学生数百人にインタビューした結果、上記のような分析を導き出した。先に述べたように、近代ヨーロッパの市民社会においては、確固としたアイデンティティ形成の背

後に近代的な意味での読書する個人が存在した。それらの人々の存在が近代市民社会を形成し支えてきた。すなわち 18 世紀以降の啓蒙主義的な近代市民社会は、読書し意見交換する公衆によって支えられてきたことになる。

フランクフルト学派の第二世代であるハーバマスは、若い頃、『公共圏の構造転換』（邦訳は『公共性の構造転換』未来社）を書いたが、彼の言う公共圏 (Public Sphere) も、まさに読書し、意見交換する公衆を市民社会の基本としてとらえていた。

タークルはコミュニケーションの形態が変わることによって、人間のアイデンティティが変容するという立場をとり、「プロテアンセルフ」(Protean Self) という表現を用いた。プロテアンセルフは、ギリシア神話のプロテウスに由来している。プロテウスは予言やご託宣に長けた神であり、人々がそれを聞こうとして訪ねると、たちどころに変身してどこかに消えてしまう。そこから「プロテアンセルフ」という言葉を導き出した。もともとは、ロバート・リフトンが『変幻自在な自己 Protean Self』という本の中で用いた表現だが、タークルは、インターネット上でコミュニケーションを行う人々は、現実世界のアイデンティティを凌駕するかたちでアイデンティティ変容を行い、ネット上で多重な自己を演出しているにとらえた。

一貫性のある本質が何もなかったら、自己 self は四方八方に分離してしまう。……どうすれば多重でありながら同時に一貫していることができるのだろうか？ 『変幻自在な自己 Protean Self』でロバート・ジェイ・リフトンは、一見矛盾するこの問題を解決しようと試みている。ギリシャ神話の海神プロテウスのように、流動的に姿を変えることができるが、基礎のところには一貫性とひとつの道德観がある。多重的だが統合されている。

(同上)

しかし後半で描かれているように、プロテウスは流動的に姿を変えることができるが、基礎のところには一貫性とひとつの道德観があり、多重的ではあっても統合されていると見なしている。しかし現在、インターネットのゲ

ームの中に没頭する人々のアイデンティティは、多重的で、しかも統合性は欠落している。まさにそういう意味でのアイデンティティ変容が生じている。

それに対して、カリフォルニア大学の社会学者マーク・ポスター(Mark Poster)は、その著“ What’s the Matter with the Internet?” (2001年)の中で、次のように述べている。

ボードリアルが示したように、電子的メディアは、物質的形態と時間的空間的秩序において、ハイパーリアルつまりシミュラクル世界を構築する。このテクノカルチュラルな環境においては、主体-客体関係は変容する。安定して中心化されたアイデンティティを保持するのではなく、主体は拡散し断片化し複数化する。……インターネットは、マスカルチャー的なモノを生産しグローバルに配信する効率を高めることで、近代的な主体-客体関係を変容させようとしている。

M. Poster, “ What’s the Matter with the Internet? ”

「近代的な主体-客体関係」とは、基本的には、デカルト、スピノザ、パスカル、ホブズ、ロック、ヒュームなどの流れにつながり、カントによって完成された観念論哲学で確立された主客関係であるが、それがインターネットの登場によって根底的に変容しつつある。

しかし、ポスターはまた別の論文で、次のように述べる。

伝統的に、人のアイデンティティは接触によって定義されてきた。アイデンティティは、身体に根ざしているのである。この身体という安定性が、個人がその地位によって認証されることを強制するし、人々の間で信頼を築くことを許容する。しかしインターネットは、自分自身のアイデンティティをみずから定義したり、勝手に変えることを許している。john@well.com というアドレスで知られている中年の元ヒッピーが、次の瞬間には kate@aol.com という十代の少女を装うことが可能である。このようなプロテアン・アイデンティティは、これまで我々が了解してきたような安定した政治的なコミュニティを形成するもので

はない。

M. Poster, “The Net as a Public Sphere?”

これは、ハーバマスの公共圏は現実の市民社会の中核であったが、同様の公共圏をインターネット上に形成できるかどうかというテーマについて述べたものだ。ポスターは、プロテアン・アイデンティティでは、現実に関与させる政治的なコミュニティを作ることはできないとしている。

それに対して、このような議論は、アイデンティティを個人のレベルで論じるものだと批判もある。特に、ポストモダニストの分析は、人間のアイデンティティ変容を簡単に引き上げて使用するため、いわゆるジャーナリスティックな受けがいいと揶揄されることがある。インターネットなど電子メディアとの関係で人間のアイデンティティについて論じるなら、もっと別の側面があるのではないかと指摘されている。

## 2.2. 目の前の危機

スペイン出身のアメリカの社会学者マヌエル・カステルズ (Manuel Castells) は、新しい状況の中でのアイデンティティ論を展開した。その大著 *The Information Age: Economy, Society and Culture, Vol. III: “End of Millennium”* (1998年) の中から論旨をまとめると、次のようになる。

1960年代後半から1970年代半ばにかけて情報技術革命(IT革命)が生じ、資本主義と国家主権主義 (statism) の経済的危機とリストラクチャリングが始まった。また文化面では、人権・フェミニズム・環境など新しい社会運動が起こった。すでに知られているように、カルチュラル・スタディーズやポスト・コロニアルズの問題設定では、政治、経済も文化の中の現象としてとらえようとしている。今や文化は、国家、民族、階級などだけではなく、エスニシティ、マイノリティ、フェミニズム、ジェンダー、宗教的原理主義などの問題を抜きにしては語れなくなっている。もはや、これまでの国民国家を支えてきた原理、特にわれわれ日本人が幻想としてきた一民族一國主義的な考え方では、現代文化を議論することはできない。こういう考え方が、文化

的社會論であり、(日本では少数派だが)反グローバリゼーションを標榜する立場である。

カステルズは、新しい支配的な社会構造が出現し、ネットワーク社会、ニューエコノミー、情報資本主義／グローバル化資本主義、ニューカルチャーなどが浮上する状況をふまえて、「目の前の危機」として、いくつかの問題点を指摘している。たとえば、資本・労働・情報・市場の新しいネットワーク化によって情報技術(IT)とITを使いこなす文化的能力の格差が顕著になり、ただ与えられた課題をこなすだけの「人間端末」(human terminal)と、自分の生活全般のプログラミングができる人間(self-programmable labor)に二極化していくと予測している。

またそういう状況のなかでは、第4世界が登場するとも指摘している。20世紀末に、第2世界(社会主義国家群)は情報時代が持つ力を制御することができずに崩壊した。また(極端な表現ではあるが)第3世界(アジア・アフリカ諸国)は地政学的意味を喪失した。欧米を中心とする第1世界(自由主義諸国)においては、多元的価値時代の成立で、一元的な価値としての自由主義的一体性が失われた。そして情報資本主義とグローバル資本主義の台頭の中で登場したのが第4世界である、というわけだ。その結果、地球上に社会的排除というブラックホールが出現し、社会的に排除された人々が先進諸国を含めてグローバルに存在しているという。

そして彼は、こういう時代状況をふまえた上で、アイデンティティを論じる必要があると述べている。すなわち、個人レベルでの意識変容、アイデンティティ変容を論じるのではなく、情報がコンピュータとコンピュータ・ネットワークを通じてやりとりされ、政治、組織、文化などあらゆるシステムが変化する時代状況の中でアイデンティティについて考える必要があるというわけだ。

そこでカステルズは、アイデンティティとは、「人間にとって意味と経験の源泉であり、文化的属性もしくは文化的属性の一連の組合せにもとづく意味構成のプロセスである」と定義する。したがって、「個人や集団的行為者にとって、複数のアイデンティティが存在しうる」として、単一のアイデンティ

ティはもともと存在していないと考え、この複数性が、自己表象と社会的行為における歪みや矛盾の源泉になると分析している。

これまで社会学の一般的な理論では、アイデンティティ＝役割理論が主流であった。しかし、カステルズは次のようにとらえる。

アイデンティティ＝「役割 role」は社会制度・組織によって構造化されており、個体化のプロセスにおいて構造化される。「役割」がアイデンティティ機能を組織化する一方で、アイデンティティも意味を組織化する。

Manuel Castells, *The Information Age: Economy, Society and Culture*, Vol. II

こうしたアイデンティティ形成の資源は、原文をそのまま紹介すれば下記のようになる。

history, geography, biology, productive and reproductive institutions, collective memory, personal fantasies, power apparatuses, religious revelations

このうち、collective memory (集団的記憶)は最近の歴史学のキーワードになっている。国家の枠組みで描かれてきた歴史記述を、民衆レベルの集団的記憶の枠組みで書き直さなければならないという考え方で、カルチュラル・スタディーズの研究者やフランスの新しい歴史学の研究者などの主張だ。power apparatuses (権力の諸装置)とは、暴力装置、監視装置、納税装置など、国家の持つさまざまな装置を指している。

このように、いろいろな要素がアイデンティティ形成のリソースになる。したがって、先に述べたプロテアンセルフ的な発想やポスター的な身体性だけでアイデンティティを論じるのは無理だと主張しているわけだ。カステルズはそのようには述べていないが、私は、アイデンティティ形成の資源の一部に変容が生じていると理解すべきではないかと思う。

さらに彼は、権力システムとの関係で、次のように3つのアイデンティテ



イを提示している。

①正統性を求めるアイデンティティ (Legitimizing identity)

これまでの市民社会論の中でグラムシ、トックヴィルなどによって論じられてきた考え方。市民社会を理想モデルとするアイデンティティ論に対して、ホルクハイマー、アドルノなどフランクフルト学派は権威主義社会論として批判した。また1960～70年代にかけて、ミシェル・フーコーは『監獄の誕生』の中で、まったく新しいアイデンティティ論を展開した。

②抵抗するアイデンティティ (Resistance identity)

コミュニケーション、コミュニティ (エスニシティ、宗教的原理主義、地域共同体) などの立場からのアイデンティティ論。

③プロジェクト・アイデンティティ (Project identity)

情報社会時代を背景とする新しいアイデンティティ論。カステルズは、①②のアイデンティティ論が情報社会でどこまで通用するか、具体的な例証をさまざまに挙げながら検証している。そして、情報社会時代における新しい主体形成が必要であると指摘しているが、それがどういふものかについては残念ながら論じていない。

このように、インターネットの爆発的な普及に同期するかのようなかたちでアイデンティティ変容論が登場してきた。カステルズは、インターネットは実際に政治、経済、社会、文化すべての面において大きな変容をもたらしつつあるが、それを背景にした新しい環境の中でのアイデンティティ論を構築しなければならないと論じている。

日本においては、メディア論の立場から、こうした議論はされていないが、欧米ではかなり進んでいる。最後に、この領域に関連して注目すべき論文を紹介しておく。

- ・ Wynn, E. and J. E. Katz, “Hyperbole over Cyberspace: Self-Presentation and Social Boundaries in Internet Home Pages and Discourse”, The Information Society, 1997 No. 3

「情報社会」(The Information Society)という雑誌に掲載されたもの。タークルなど個人的なレベルでのアイデンティティ変容論に対する反論でもある。実際、ホームページにおける言説を調べてみると、人間は決してそんなに簡単にアイデンティティを変容させない。むしろインターネットという情報コミュニケーションの新しいツールの登場により、社会的境界を再設定する必要があると論じている。

- ・ Scott Lash, Critique of Information, Sage Publications, 2002

どちらかと言えば、個人レベルでのアイデンティティの変容にウエイトを置いた論調であるが、インターネットがわれわれの生活世界にもたらしたものは、時間、空間の圧縮であると分析している。

### 〈質疑応答〉

#### ■リアル空間を豊かにするためのデジタル・コミュニケーション

—— 人間と人間の個人的接触が最近はしだいに希薄になり、透明人間的な気分が広がっているようだが。

**合庭** 私も同様の感覚を抱いている。かつて20年以上編集者として仕事をしていた頃は、精神的にも物理的にも執筆者とのコンタクトを頻繁に行ってきたが、最近の編集者は、原稿依頼から督促までメールですべてすませる。先日愕然としたのは、ある若い編集者が、原稿を「回収する」という表現を使ったことだ。電子的なメディアが深化してくると、これまで当然と思っていたコミュニケーションも変化してくるし、言葉遣いも変わってくる。それに対して愛惜の念をもつか、積極的に関与するか、それぞれの人の選択が問われている。私自身はあくまでもリアルワール

ドが最優先であり、リアルな空間に、より豊かな意味を与えるものとして、バーチャルなコミュニケーション・ツールがあると思いたい。しかし実際には、面倒なので、ついメールにしてしまうこともしばしばだが……。

私は、ここ十何年か、デジタル・ライブラリーの仕事をしている。その関係で図書館の人たちと話をする機会が多いのだが、コンピュータ・サイエンス系でデジタル・ライブラリーに関心を持つ人は、電子図書館ができれば、実際の図書館は不要だと考える傾向がある。しかし、デジタルな装置が出現するとリアルなウェイトが低下するという考え方ではなく、現実存在する図書館機能は、今以上に高品質化することが求められ、その一つの選択肢としてデジタル・ライブラリーがあると考えるべきだろう。

すなわち、現実をより豊かにする一つ的手段として、デジタル化があると考えたい。もちろん新しいメディアは古いメディアを模倣するから、どこかでテイクオフはある。しかし、それがどのような形態であるかは一般論としては言えない。もしかしたら、読書の習慣がインターネットを介したコミュニケーションに完全に置き換えられるとしたら、図書館の蔵書の意味はなくなるかもしれない。しかし、それは急激には起こらない。現実には、日本における出版物はどんどん増えており、図書館の役割は過去よりさらに重要になっている。

—— アイデンティティを論じる専門家集団においては、どういう観点が評価されるのか。

**合庭** こうしたテーマには反証可能性はない。要は、物語を書くことだ。社会科学では物語を書いて、読者がたくさんいればいい。つまりストーリーテリングが成功するかどうかで、政策の実現力などはない。主体性論に代わってアイデンティティ論が出てきたのは、アメリカの心理学者エリック・エリクソンが「アイデンティティ」を提唱して以来だ。主体や自己よりアイデンティティのほうが、より豊かな議論ができるということ

で、ここ30年くらい用いられている。哲学用語では、ドイツ語で「同一性」と呼ばれて議論されてきたので、ヨーロッパ系の哲学ではアイデンティティという表現はなじみにくい。アメリカでは、心理学、社会学、哲学などで多用されているし、日本でもアイデンティティ論は多い。学問分野としては、社会学、心理学、社会心理学、哲学、文学評論などにまたがる。日本社会でこの言葉が一般に流布するようになったのは、大江健三郎がアイデンティティについて書いて以来で、それが一般になじむ契機となった。

### ■インターネット世代にとってのアイデンティティとは

—— 今のインターネットを通じて自己形成してきた世代にとっては、デジタルのほうがリアルだと思う。しかし研究者は、インターネットがない時代に自己形成してきた、という大きな問題がある。

**合庭** 研究の歴史的成果からすると、パソコン通信の時代は、通信の内容を追跡調査する研究者がいて論文を書いていた。しかしウェブメール、インターネットになると追跡が非常に困難だ。パソコン通信の場合は、発信者がある程度特定可能だし、また共通テーマもあったが、今の2チャンネルは、誰がどんな目的で情報発信しているのか追跡はできない。そういうことも含めて、最近の著作では関心をひくものはない。インターネットの開発はもともとアーパネットで、その中の掲示板が残っているので、グーグルのサーバーでうまく検索すると読めるし、ハンドルでもだいたい分かる仕組みになっている。そういう意味で個人がある程度特定できる。しかし今のチャットではまったく分からない。そういうところでアイデンティティ分析をしようとしているのは、指摘されたように、インターネットという新しいメディアにぶつかった前世紀の世代だ。生まれつきそういう環境にいる若い世代にとっては、インターネットは当然の存在であり、研究対象化されることはないかもしれない。

—— ストーリーづくりはどうか。

**合庭** もちろん調査はするが、結果を組み立てていくときに、因果律など法則定立的なものにはなりにくい。物語として成功させるためには、ストーリーとしての構成力が必要になってくる。

—— それでは何のためのアイデンティティ論研究か。物語の過剰生産として消費されるだけではないのか。

**合庭** 18世紀以降の近代市民社会を背景にしたアイデンティティ論は、明治以降日本が近代国家を形成するときの基盤となった。その考え方をもとに、法制度、政治システムなどさまざまな制度を作った。またその中で日本人も自己形成してきた。歴史をさかのぼって調べたり考えたり、その中でこれまでと違う見方を発見したりするのは、自己を確認する作業であるし、インターネット世代にとっても自らを知る契機になると思う。何かを知りたいというのは、学問研究の出発点だろう。

—— 近代社会を形成したグーテンベルク銀河系が終焉し、変容しようとしているという指摘だが、ヨーロッパの場合はよく分かる。しかし日本の場合、そもそもヨーロッパ的な意味での近代社会は形成されていたか、どうか。形成されないままインターネット時代になっているという意味で、特殊な要素があるのではないか。

**合庭** 日本の場合、歴史的に近代市民社会が形成されたことはない。しかし、制度やモデルとしては導入されている。したがって、ヨーロッパが経験した、専制主義的国家と市民主義社会のコンフリクトがないままに、市民社会が導入された。だからわれわれは国民意識はおしつけられてきたが、市民意識は非常に希薄だ。近代国家形成の基盤としての市民社会を自発的にもちえていない。道徳教育でも公民、市民という感覚はない。市民社会を構成する市民としての義務と権利は制度として導入されたが、実体をともなっていない。ハーバマスなど公共圏の議論は意味はあるが、日本でどう展開するかはこれからの課題だろう。